

法然の菩提心観の展開

清岡 隆文

浄土三部經には菩提心（無上道心、阿耨多羅三藐三菩提心、無上正真道なども同意）なる表現が『大經』第十九願、第三十五願、三輩章あるいは『觀經』九品中の上品下生、下品各生等に頻出する。法然はこの三經をおさえた上で『選択集』念仏付属章に「以_三此等行_三殆抑_三念仏_三。情尋_三經意_三者不_三以_三此諸行_三付属流通_三唯以_三念仏一行_三即使_三付_三属流通_三後世_三。」と示して善導の意を受けて菩提心を諸行として選択本願の意に照して廢捨しているのである。ただ法然のその他の著作特に『逆修說法』『三部經大意』『七箇条起請文』等では菩提心を全面的に否定するのではなく、聖道門の菩提心に対比して浄土の菩提心のあることを認め、そこでは願生心、度衆生心、三心中の至誠心のような意味づけをしていることが注目される。さて『選択集』の公刊後わずか二ヶ月半を経て書きあげられたものが高弁の『摧邪輪』であり、その内容は法然の『選択集』における菩提心廢捨に対する難詰で全篇うめつくされている。「今依_三聖教_三檢_三察此集宗要_三大違_三背法印_三相_三順邪道_三。將_三令_三婦信人荷_三重罪_三。依_三之愚僧天性雖_三倦_三於執筆_三試撰_三一章_三聊決_三邪正_三。」との書きだしの調子は激しく、そこでは仏教の根本法印である無常、無我、涅槃寂靜に背き、浄土往生の人を迷わす邪道であるときめつけ、自分こそは善導の釈に忠実であり、その真意を明らかにして、それによって法

然の善導浄土教理解の間違いを難詰するという態度にでている。

『摧邪輪』における反論の中心点は既に明らかのように、「菩提心を撥去する過失」にあり、さらにそれは五種の細目に分類されている（浄全八、六七七）。高弁の菩提心観については種々の角度から研究がなされているが、ここでは特に基本的な菩提心の体性、本願との関係、諸行業との関係について考察してみよう。まず高弁は菩提心の体性については空性無我なるゆえにこれを否定することは外道であると決めつける。また「聖道の菩提心」に対しては「浄土の菩提心」を明示し、両者の菩提心は体は一にして行相に浅深ありと説いている。つぎに菩提心と本願については、「浄土宗の經論の文、人師の解釈、また菩提心を以て正因とす。」（同、六九五）とて菩提心正因説さえ主張するのである。最後に菩提心と諸行業については法然は菩提心と菩提心之行とを混同しているとして、菩提心即行ではなくて、万行の根本に菩提心を置いたのである。さて高弁のこれらの問題提起に対する対応こそが法然門下初期教学の重要な課題であった。門下教学における全般的な特色・傾向としては、そのいずれもが法然伝統の浄土一宗念仏一行専修を軸として、法然の微意を拡充して高弁等に対応する姿勢を示している。ただその中でも他力強調的傾向（高弁に対する強い反抗姿勢）の隆寛・証空・幸西等と自力強調的傾向（高弁に対する妥協的姿勢）の弁長・長西等に分岐されることに注目しなければなるまい。さて他力強調的門下の中でまず隆寛は『極楽浄土宗義』（隆寛全集、九一）で浄土の菩提心をとおりあげ、それを願生心、度衆生心として位置づけている。特に度衆生心については曇鸞に直接して解釈していることは法然義の顕著な

展開としてその意義は大きい。幸西は『玄義分抄』等において菩提心を「願往生の心」と理解し、また『源流章』で「転菩提心」と示される意は、一応菩提心を取りこみながら、廻転とはいえ強く聖道門の菩提心を廢捨するのである（『源流章解説』参照）。証空は『序分義他筆鈔』（西全五、二四）にて「発菩提心之事」として『安樂集』の菩提心義をそのまま引用しているが、そこで示される菩提心の体性は自性空義の基盤に立つものである。また『玄観門義』（西全三、九）等において明確に聖道の菩提心に対して浄土の菩提心を区別しており、特に『西山善慧上人御法語』ではそれらを「仏にならんとし思ひ待る心」に対して「仏に助けられまゐらせんと思う心」として理解されており、これぞ正しく法然伝統の意であつて、平易な表現をもつて願生心として把握している。また『観念法門観門義』（西全別一、四四）では浄土門観門の菩提心について、菩提心は本来的には諸行位のものであるとおさえ、観門として心得れば「西方ヲネガフ心」なる西方願生心として証空独自の開会的解釈がおこなわれている。しかし結論的には菩提心は大体聖道行門諸行位のもので浄土門としては直ちに依用できないとの意を汲みとることができる。一方、自力強調的門下の菩提心についての理解を考察してみよう。弁長は『徹撰択』（浄全七、九〇）において菩提心に二ありとして凡位（浄土門）の菩提心と聖位（聖道門）の菩提心を挙げている。さらに凡位の菩提心については薄地の凡夫の菩提心と六度の菩薩の菩提心に分けている。これは機類によつて菩提心を区別しているものであり、法然が自己を「十惡の法然房愚痴の法然房」と内省した点よりみれば、薄地の凡夫の菩提心が一称一礼の功德（専修念仏）をもつて願生する点にこそその主張の眼目があつたと思われる。

法然の菩提心観の展開（清 岡）

る。『徹撰択』（同、九一）ではさらに続けて、菩提心に二有りとして一には菩提心願、二には菩提心行と提示する。これは法然が菩提心と菩提心之行とを全く区別していないと批判する高弁の問題提起に対して、弁長がそれを顧慮して答えていこうとした部分と見たい。弁長によれば菩提心願とは四弘誓願にあたり、菩提心行とは六度万行をさすとするのである。特にここで高弁の反論との関係で問題となる菩提心願については、その内容を四種あげているが、特にその中で善導の意をうけて六字釈の発願廻向を菩提心とみ、還相廻向の利他心を菩提心とみるが如き注目すべき理解がある。これもまた法然の語録でみられた菩提心観の一展開であらう。最後に長西については、基本的に法然門下としては異色であり特に『観經疏光明抄』『選択集名体決』等をうかがうと、聖淨融会的主張が色濃く、その点で高弁等の反論に対しては最も妥協的に解答する地位にいたと思われる。『同光明抄』序分義散善願行縁下で三福を四分類し、『観經』所説の三福中の一福である菩提心を特に別釈するのは菩提心が正しく仏果を得べき心なるが故、菩提心は特に道分であることを明らかにし、余の三福行は功德善根としての福分であるなどと福分起行の三福業に対する道分安心の菩提心として菩提心を見出し、ここでは菩提心が仏果菩提を得る基底的なる道として位置づけられている。さらに散善義至誠心積下では三心との関係について触れ、三心は自利の願生心であり、菩提心は利他道分の安心にして、三心発得願生者には、利他還相の菩提心は具せないと主張している。

（西本願寺宗学院研究生）